

STAGE 4

説明的文章（人文科学）

① 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 日本語については、とかく、主語がはっきりしなくて曖昧だとか、述語が最後にくるので言いたいことが分からないとか、あれやこれやと議論が絶えない。だが、私は、日ごろからそれらを、¹ 的外れもはなはだしい擬似問題だと思っている。それどころか、そのように問題とされるところにこそ、日本語の最も論理的な部分があるとさえ考えているのである。唐突な質問ではあるけれど、手紙の宛名の書き方は、はたして日本流と西洋流とどちらがすぐれているだろうか。そう、私たちは「〇〇県」「〇〇市」「〇〇町」「〇丁目」「〇番地」という形で、⁽¹⁾ 大きなカテゴリーから次第に小さなものへと限定し、最後に個人の名前をもつてくるが、西洋ではこれが逆になるというあの書き方である。いかがだろう。私は、² まぎれもなく日本流が理にかなっていると感じるし、そのことは、実は、多くのフランスの友人たちも認めているところなのだ。

② 日本語の主語・述語と呼ばれるものの働きは、まさにこの宛名書きの形式に一致する。ために、主語をめぐる議論で有名になった「象は鼻が長い」の一文を考えてみよう。そもそも日本語に主語という概念がふさわしいかどうかを検討せずに、「象は」が主語か「鼻が」が主語か、など論じることがやめにして、今は、この表現の論理展開だけに注目していただきたい。まずこの表現は、「象は」と言って、語るべき主題を提示し、さらにこの主題のなかで「鼻」を限定することによって、順次、その内実を語っていく。つまり、日本語の論理プロセスも、基本は宛名書きと同じく、大きなカテゴリーから次第に小さなものへと絞りこんでいくスタイルなのである。

③ こうした日本語の発想はすぐれて「探索的」かつ「発見的」なものとなる。なぜならそれは、私たちの内部で初めは漠然としていたものが、次第に明らかになっていくプロセスを正確にたどっているからだ。当初は何もないところで、にわかになんかの意味が姿をとり始める。それを私たちは「は」という表現により、かなり、⁽²⁾ 大ざっぱな一領域として設定する。そしてこの領

域がひとたび決まれば、今度はそこに「は」という表現があらわれてその領域をさらに細かく限定する。この限定されたものは、さらに次の表現によって限定され、それはまた……と続いて以下同文。最後には、見事に⁽³⁾ 彫琢された結論が得られるというわけである。

④ とりわけ、このプロセスにおける最初の「は」という表現などは、日本語の特徴をきわだたせるものであるとともに、単なる言語学的な視点をこえたところで、豊かな思想的意味を³ かいま見せてくれもする。通常、学校文法では「は」「が」「も」などの格助詞をしたがえるものを「主語」といってはばからない。しかしながら、「佐藤はもうとつくに来ているけれど、鈴木はまだ見ていないなあ」というような場合、⁴ 「鈴木は」の部分の主語と呼ぶわけにもいかないだろう。そこで国語学者たちは、「は」という表現に「⁽⁴⁾ 提示」といった定義を与えて、決着をつけたように思いこむ。そして思いこんで安心し、「は」のもつ⁵ 認識論的な重要性をすっかり見のがしてしまうのである。

⑤ あたりまえのことながら、私たちはつねに世界のなかで生き、そこであれやこれやの関心をもちながら、世界とさまざまな関係を取り結んでいる。私たちが、べつにこれといった注意もはらわなければ、世界は、⁽³⁾ ほんやりとしたまどろみのなかにあるのだが、ひとたびそのどこかに注意を向けるならば、とたんに世界も、それに応じた表情を見せるようになってくる。したがって、世界と私たちとは表裏の関係にあると言っているだろう。

⑥ こうした世界のただなかであって、私たちの前には、いつも一つの「知覚野」と呼ばれる意識の領野が広がっているのだが、ここに、ある時ふいに、⁽⁴⁾ 曖昧模糊としたうながしのようなものが生じてくる。このうながしは、少しずつ意識化のプロセスをたどり、それが次第に形をとって、ついには命名というレベルにまで達することになる。そこで私たちは、「は」という言いまわしによって、言語表現への決定的な第一歩を踏み出すことになるわけだ。つまり、やや大げさな物言いを許していただけのならば、「は」には、

